

|           |   |         |              |
|-----------|---|---------|--------------|
| 科目名（英文表記） | ベンチャー経営Ⅱ<br>(テクノロジービジネス創造)<br>(Technology Business Creation)                  |         |              |
| 科目区分      | 発展科目  | 単位数     | 2 単位         |
| 担当教員名     | 瀬戸 篤・武田 立 (元SONYエンジニア)  |         |              |
| 研究室番号     | (瀬戸) 528  | 研究室電話番号 | (瀬戸) 27-5306 |
| Eメール・アドレス | (瀬戸) <a href="mailto:atseto@res.otaru-uc.ac.jp">atseto@res.otaru-uc.ac.jp</a> |         |              |

**授業の内容及び方法：**次頁以降に記載

**授業の目的：**

目的は、ベンチャー経営Ⅰで学んだ企業家精神を我が国未来のため最高度に発揮するテクノロジーベンチャー創造に欠かせない理論と方法論を学ぶ。

我が国は、石油・天然ガスなど鉱物資源のほぼ100%、食料原料の60%を輸入に依存せざるを得ない高度な産業国家である。そのため、**独自の知財に基づくハイテク製品を国内で開発製造輸出**できなければ、国内産業は必要原料を輸入できず、そこに雇用が生まれず、子供や高齢者などを守る国民生活は成り立たない。このような高度なハイテク製品を次々と国内で生み出してゆくためには、**大学や国立研究機関で生まれたてのサイエンスを、産業界が実用化できるテクノロジーまでレベルアップさせるテクノロジーベンチャー**が欠かせず、これが世界の常識（グローバルスタンダード）である。

テクノロジーベンチャーを創出するには、はじめに**ベンチャー経営Ⅰで学ぶ企業家精神の理解と体現が最大の必要条件**である。次に、明治以降今日までの我が国テクノロジーイノベーションの成功と失敗をふまえ、21世紀の国民生活を支える**テクノロジーベンチャーの創出方法論を学ぶことが十分要件**となる。豊かな農林水産業を持ちながらも、依然として国内GDPの4%未満という脆弱な北海道経済の根本的問題は、**世界を相手に独自技術で戦うテクノロジーベンチャーがほとんど生まれ、育っていないことが最大の理由**である（明治初期に北海道開拓使ならび札幌農学校が技術導入した酪農と酪農製品製造・ビール醸造・冷害に強い穀物果実づくりは、すべて当時のハイテクだった。）。

第一次世界大戦の前夜、我が国では明治維新いらい外国からの鉱業品ばかりであった電動モーターと発電機の純国産化を目指して、一つのテクノロジーベンチャーがたった1人の電気エンジニアによって茨城県で創業された。それが今日、日本最大の雇用数32万人（全世界）を有し、**世界を代表する日本の製造業「日立製作所株式会社」**である。日立もまた、現在は大企業であっても、始まりは1人創業者と数名の部下をもって1世紀前に設立されたテクノロジーベンチャーだった。だからこそ、私たちは現在の豊かさや快適さに決して溺れ自惚れることなく、21世紀に活躍し、やがて22世紀には大企業となるであろう第二・第三の日立製作所の原型となるテクノロジーベンチャーを、私たちの手で創出し、懸命にそして暖かく応援・投資してゆかねばならない。膨大な税金を投入され、恵まれた教育研究環境にある**国立大学は、教員学生を母とすれば、テクノロジー創造の父なのだ。**

本講義では、以上の背景から、2000年以降に我が国でも急速な進化を遂げ始めたバイオ・ITをはじめとする先端テクノロジーベンチャー創造の方法論を、短期間で体系的かつ集中的に学ぶことにある。そのため、本カリキュラムでは、Ⅰで我が国における**テクノロジーイノベーションの歴史**を学び、Ⅱでは**支援当事者からベンチャー創出のための技術**を学ぶ。

到達目標は、テクノロジーベンチャーの創業者予定者、社内新規事業担当者、大手中堅企業の研究開発企画マネージャー、大学・国公立研究所に勤務する現役研究者、VC投資担当者、およびTLOや大学事務局の技術移転組織で働く人材の集中的かつ戦略的な育成にある。同時に、テクノロジーに関心のあるすべてのビジネスリーダーへの、新たな視点注入も重要だ。それゆえ、

テクノロジーを基盤とするビジネス創出に関心をもつ、理系・文系を問わない全てのバックグラウンドをもつ受講者を歓迎する。本講義で招聘するゲストレクチャーは共同講師を含め、我が国を代表するテクノロジーベンチャーSONYで技術開発と戦略策定に携わったエンジニアであり、あるいは現在もマザーズ上場審査や大学特許出願などの第一線で働いているプロフェッショナルである。そこから得られる知己は、OBSならではの、諸君の近未来における大いなる財産と実力につながることは間違いない。

本講義は、以上をわずか四ヶ月で学ぶため以下の三部から構成される。

#### 第一部 テクノロジーイノベーションの現実

- M1 我が国戦前から戦中にかけてイノベーションの成功と失敗(瀬戸)
- M2 我が国戦後イノベーションの成功と失敗(武田)
- M3 イノベーションの方程式(武田)

#### 第二部 テクノロジービジネス創造の方法論

- M4 Commercialization: 商業化(瀬戸)
- M5 Intellectual Property: 知財化(瀬戸・弁理士)
- M6 Exit: 出口化(瀬戸・公認会計士)
- M7 Capitalization: 資本化(武田)

#### 第三部 OB特別講義と総括

- M8 OB 特別講義—社内ベンチャーにおける成功と失敗(OBS・OB/三菱商事)

\* 多忙なゲストスピーカーの業務都合により、M5-M7の順番をやむを得ず変更することがある

#### 使用教材:

- M1-3: 武田・瀬戸『イノベーションの成功と失敗』同文館(2015)
- M4: 瀬戸篤「大学発ベンチャー支援システムの研究 I および II」小樽商科大学編『商学討究』第52巻2・3号および4号(2001年12月、2002年3月)(\*商大図書館HPよりダウンロード可)
- M5: 標準化経済性研究会『国際競争とグローバル・スタンダード』日本規格協会(2006)
- M6-7: 伊丹敬介・宮永博史『技術を武器にする経営』日本経済新聞社(2014)
- \* パワーポイント資料類は、講演者の了解を得たものを配付資料として配布する。
- 最終課題:P・ドラッカー『テクノロジストの条件』ダイヤモンド(2005)

#### 成績評価の方法:

| 評価の要素               | ウェイト |
|---------------------|------|
| 出席率                 | 10%  |
| 授業への参加度(事例, 討論, 調査) | 10%  |
| ホームワーク(事前の課題の提出)    | 50%  |
| 小テストないしクイズ          | 0%   |
| 最終課題の提出             | 30%  |

評価に不服のある場合には、不服申立書を以て、教務委員長に申し出ること。

#### 履修上の注意事項:

- 試験ないしクイズなどは授業中に行わないが、講義開始時までの課題提出(アップ)が評価の絶対要件である。
- 欠席した場合、理由の如何を問わず最終成績から1/8(二回なら2/8)を減ずる。
- 課題は、A4で40文字×40行の11ポイント(標題MSP、本文MS明朝)、マージは上下左右ともに30mm、下部中央にページ番号。9ポイントで右上フッターに二段書きで1段目が「モジュール名・提出課題種類・対象図書ないし講師」、2段目には「学生番号&氏名」を明記する。さらに提出ファイル名には氏名を必ずつけること。
- M6-7には外部講師が来るので、ビジネスマナー(スーツ又はジャケット着用)に留意されたい。また終了後、講師と会食するので名刺交換されたい。